

阪神・淡路大震災の記憶継承に関する震災後世代の意識と態度 : 2019年度調査の分析

著者	山中 速人, 照本 清峰, 津田 睦美, 奈良 雅美, 金 千秋
雑誌名	総合政策研究
号	64
ページ	73-94
発行年	2022-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10236/00030250

阪神・淡路大震災の記憶継承に関する 震災後世代の意識と態度

～ 2019年度調査の分析～

Awareness and Attitudes of the Post-Hanshin-Awaji Earthquake Generation Toward Passing on the Memories of the Disaster : An Analytical Report on the Fiscal 2019 Survey

山中 速人¹・照本 清峰²・津田 睦美³・奈良 雅美⁴・金 千秋⁵

Hayato Yamanaka, Kiyomine Terumoto, Mutsumi Tsuda, Masami Nara, Chiaki Kim

January 17, 2020, marks the 25th year since the Great Hanshin-Awaji Great Earthquake. Over this time, several generations have been born in the disaster area with no knowledge of the great earthquake. Yet the post-disaster generations have a role to play in making sure that the memories of the great disaster are carried forward. To clarify their attitudes and opinions about the disasters, a survey was carried out in 2019 by the School of Policy Studies of Kwasei Gakuin University and FMYY, a community broadcasting station in Kobe. The survey targeted undergraduate students at three universities (Kwasei Gakuin University, Kobe University, and Kobe Tokiwa University) in the vicinity of the disaster area, with a total of 445 valid responses. A similar survey was conducted in fiscal 2020. The basic outcomes of these surveys have already been reported in volumes 61 and 63 of this journal. This paper provides a more in-depth analysis of the 2019 survey data. The analysis results are as follows. First, with regard to the means by which knowledge and information about the disaster was obtained, respondents who were from the disaster area and had lived there for a long time tended to have more opportunities to learn directly from the survivors about their experiences and memories. Many also said they had opportunities to learn about the disaster through their school education, in contrast, those who were not from the disaster area or who had not lived there very long tended to acquire their disaster information through such visual media as television, film, and the Internet. Next, regarding interest in the disaster and what kinds of memories should be passed on, survey responses were roughly divided into two groups: 1. Those who showed a greater interest in the human narratives of disaster victims and volunteers, and 2. Those who showed a greater interest in lifesaving activities and disaster prevention measures. Regarding awareness and attitudes towards the disaster and passing on the memories of the disaster, it was found that respondents who were from the disaster area and had lived there for a long time understood the importance of having survivors narrate their emotions and experiences and were willing to play an active role in passing on the processes by which the region recovered from the disaster. More men than women expressed the opinion that it was better to erase the scars of the disaster and rebuild completely new. Finally, with regard to methods of conveying the memories of the disaster, the three methods of direct communication, such as narrations by survivors, school education, and media, such as recorded images, were found to be strongly interconnected, while the transmission of memory through museums and memorial events was only weakly related to the other methods. Hopefully, diverse methods will continue to be used to pass on the memories of the disaster.

キーワード：災害記憶、震災後世代、阪神・淡路大震災、集合的記憶、意識調査

Key Words : Disaster Memory, Post-quake Generation, The 1995 Southern Hyogo Earthquake, Collective Memory, Opinion Research

1 2019年度、2020年度総合政策学部共同研究「阪神・淡路大震災の記憶継承に関する大震災後世代の意識調査、および地元コミュニティ放送局との災害記憶継承番組の共同制作」研究代表者、関西学院大学総合政策学部教授

2 同研究分担者、同学部教授

3 同研究分担者、同学部教授

4 同研究分担者、同学部非常勤講師

5 同研究協力者、特定非営利活動法人エフエムわいわい代表理事

はじめに

2020年1月17日に、兵庫県南部地震の被災地は地震発災25年を迎えた。この地震は、以来、阪神・淡路大震災(以下、大震災と呼ぶ)と呼ばれ、戦後日本を襲った数々の地震の中でも、その規模と被害の大きさにおいて、特筆される震災の一つとなった。多くの被災者にとって、大震災はいまだ忘れ去ることのできない生々しい記憶の源泉である。しかし、一方、今日、被災地に居住する人々の中で、大震災後に誕生した世代は着実に増加している。

発災後四半世紀が過ぎた今日、大震災の歴史的事実の収集と記録、そして、それらを人々の記憶として継承していくことが重要な社会的課題になっている。それは、将来の災害に備え、それによる被害を防ぐためにも、必要な作業である。この大震災の歴史と記憶を次世代に継承していく上で重要な役割を担うのは、震災後に誕生した世代であることは、いうまでもない。彼ら／彼女らが、大震災について、どのような認知を持ち、また、その記憶の継承に関して、どのような意識と態度をもっているかは、この歴史的記憶を継承する作業の成否の鍵となる重要な要素であるといっても言い過ぎではない。

災害や戦争など、歴史に刻まれた負の記憶を社会が継承しようとするとき、それを実効ある営みとなすために、多くの知的作業が費やされてきた。ただ、その多くは、伝えるべき記憶をもつ当事者からの視点に軸足を置くものであったといえる。それは、阪神・淡路大震災の記憶の継承についても言えることである⁶。もちろん、そのような知的作業の重要性は、これからも色褪

せることはないが、同時に、それら記憶のバトンを受け継ぎ、次世代に伝えていく主体となる次世代への関心も欠くことができない。大震災を直接知らない震災後世代の彼ら／彼女らが、大震災について、どのような認知を持ち、また、その記憶の継承に関して、どのような意識と態度をもっているかを明らかにしたい。このような問題関心に立って、本研究班は、2019年度と2020年度の2年に亘って、被災地とその周辺に位置する大学で学ぶ震災後世代を対象に大震災についての認知と記憶継承に関する意識調査を実施した。

A. 2つの調査の概要

A-1. 調査目的と方法

この2つの調査は、被災地周辺の複数の大学に学ぶ大震災後世代の若者を対象に実施された。調査では、5つの大きなカテゴリから構成される質問項目群が用意された。そのカテゴリとは、以下のようなものである。

- (1) 大震災についての知識や情報を何から知ったか
- (2) 大震災についてのどんな事象に関心があるか
- (3) 大震災やその記憶継承についての意識や態度
- (4) 大震災のどんな記憶を語り継ぐ必要があると思うか
- (5) 大震災の経験や記憶を伝えるために、どんな手段が効果的だと思うか

2019年度の調査に関する結果については、すでに2020年発行の本研究誌において、単純集計を中心にその基礎的な部分に関する報告が発表された⁷。また、この調査に続く2020年度の調査では、前年の調査で捉えられたいくつかの知見をより明

6 阪神・淡路大震災の生存者による震災の「語り」の規模と特徴については、伊藤聖子が2020年2月にトルコ共和国カイセリで開催されたUSBIK (Uluslararası Sosyal Bilimler Kongresine) 2020に提出された論文で詳細に論じている。以下は、その詳録。KIYOKO ITO, 1995 GÜNEY HYOGO DEPREMİNİ VE 1999 MARMARA DEPREMİNİ YAŞAYANLARIN ANLATILARININ SOSYO-KÜLTÜREL AÇIDAN MUKAYESE ÇALIŞMASI, USBIK 2020 3rd INTERNATIONAL SOCIAL SCIENCES CONGRESS FULL TEXTS E-BOOK, 2020, pp.271-276.

7 山中速人、照本清峰、奈良雅美、金千秋「阪神・淡路大震災の記憶継承に関する 震災後世代の意識と態度～調査報告(基礎編)～」『総合政策研究』第61号、pp.47-69、2020年9月20日

確にするため、2019年度の質問項目群を精査し、また、新たな項目群を加えた調査が実施された。この2020年度の調査が実施された時期は、コロナ禍によって社会が大きな変化に晒された時期でもあり、大震災の記憶継承に対して調査対象者が抱く意識や態度に、コロナ禍がどのような影響を与えるかについても問題関心を広げ、コロナ禍に関連する質問項目群も加えて調査が実施された。この2020年度調査に関しても、本研究誌において、単純集計を中心にその基礎的な部分に関する報告が行われた⁸。

調査方法は、2019年度調査では、アンケート形式の質問紙とマークシートによる調査手法が採用された。2020年度調査では、コロナ禍による教室授業停止の影響を受け、インターネットを介したアンケート調査方式(Googleフォーム)が採用され、ウェブサイトに質問群を置き、被験者がそれに直接アクセスして回答するよう求める方法で行われた。得られたデータは、Googleフォームの集計機能を使って単純集計を行うと同時に、マトリクス形式のローデータも併せて取得し、独自に分析を行った。

調査期間は、2019年度調査については、2019年7月から夏期休暇を挟んで10月までの4ヵ月、2020年度調査については、2020年6月から7月にかけての1ヵ月であった。

調査実施主体は、関西学院大学総合政策学部共同研究班と阪神・淡路大震災の被災地、神戸市長田のコミュニティ放送局である特定非営利活動法人エフエムわいわいである。この研究プロジェクトは、同総合政策学部から2019年度・2020年度学部共同研究⁹、ならびに2020年度同大学共同研究

補助金対象研究¹⁰、さらに2020年度学術振興会科学研究費補助金対象研究¹¹としての予算的裏付けを得て実施された。

A-2. 調査対象者の特徴

調査対象は、2019年度調査では、大震災の被災地に位置する3つの大学(関西学院大学、神戸常盤大学、神戸大学)の学部生を対象者として実施し、最大445の有効サンプルを得た¹²。続く2020年度調査では、同じく大震災の被災地に位置する3つの大学(関西学院大学、神戸常盤大学、兵庫県立大学)の学部生を対象として実施され、749の有効サンプルを得ることができた。

これら2つの調査の対象者の特徴は、本論に先立つ2つの調査報告で明らかになっているように、次のような特徴をもっている。まず、年齢では、ともに回答者の9割以上が18歳から21歳までの大学学部であった。性別で見ると、調査を実施した大学学部の学生構成比を反映して、回答者の6割程度を女性が占めた。つぎに、回答者の出生地では、被災地出身者が、2019年度調査では3割弱、2020年度調査では2割程度を占め、現在の居住地では、被災地に居住する回答者が、2019年度調査では5割強、2020年度調査では4割弱を占めた。また、居住経験では、被災地に4年以上の居住経験をもつ者が2019年度調査では全体の4分の1程度、2020年度調査では4分の1弱を占めた。また、回答者の中で、家族や親類、友人知人に被災経験をもつ人がどのくらいいるかについては、2019年度調査では5割強、2020年度調査では6割弱を示した。彼らの概況からは、被災地およびその周辺の大学で学ぶ学生とはいえ、なんらかの意味で被災地と

8 山中速人、照本清峰、津田睦美、奈良雅美、金千秋「阪神・淡路大震災後世代の震災記憶継承とコロナ禍に関する意識と態度～2020年度調査報告(基礎編)～」『総合政策研究』第63号

9 「阪神・淡路大震災の記憶継承に関する大震災後世代の意識調査、および地元コミュニティ放送局との災害記憶継承番組の共同制作」

10 「阪神・淡路大震災の記憶継承にかかる震災後世代への意識調査と国際研究交流」

11 「災害後世代による災害記憶の継承にかかる地域メディアの役割に関する国際共同調査」

12 2019年度調査では、調査対象である3つの大学の学生に対して、部分的に異なる質問項目を加えた質問紙を用意したため、質問紙の差異によって、その質問項目に対する有効回答数に差異が生じることとなった。

のつながりをもつ学生は身近なところに被災経験者がいるという点を除けば、少数派であり、大半の学生は大震災との関連をほとんどたない学生が多数派であることがわかる。

本論文は、これらのすでに公表されている基礎的な調査報告で明らかにされた、震災後世代の震災認知や震災記憶の継承にかかる意識態度の全体的傾向を前提として、さらに、調査で得られたデータを多変量解析などの分析手法を用いることで、これら震災後世代のもつ震災認知や震災記憶の継承にかかる意識態度の特徴と傾向をより精緻にあきらかにすることを目的としている。この号は、本論の前半部分として、これら2つの調査のうち、おもに2019年度調査によって得られたデータの分析とその結果を報告するものである。

B. 調査結果とその分析

B-1. 震災後世代は大震災についての知識や情報を何から得たか

すでに公表されている報告論文(基礎編)で明らかのように、学校の授業が76.2%、教科書が63.6%と、震災後世代は、もっぱら学校教育をとおして大震災についての知識や情報を得てきた。つぎに、第2番目の入手経路として、親やきょうだい、親戚など家族から聞いたという回答が67.0%あった。これに続く第3番目の入手経路は、ノンフィクション映像の54.2%であった。これらの3つの入手経路は、いずれも過半数を示した。一方、これらに対して、博物館やモニュメント、記念行事などから知ったという回答者は、いずれも低い値にとどまった。¹³

このような全体的傾向を念頭に置いて、それでは、これらの情報源が回答者においてどのように交差しているのかをクラスター分析によって明ら

かにしてみたい。

2019年度調査データをもとに、大震災の知識や情報の入手元に関する20の情報ソース(変数群)に対して、クラスター分析を行なった。分析法としては、ウォード法を採用し、結果、析出されたクラスターを図1のデンドログラムとして描出した。

質問肢を構成する段階で、「人から直接」、「学校教育をつうじて」、「メディアをつうじて」、「博物館やモニュメントをつうじて」、「追悼・記念行事をつうじて」の5つのタイプの情報ソースのカテゴリーを念頭において、選択肢を設定した。それを反映して、析出されたクラスターも概ね同様のクラスターを形成した。

ただ、注目すべき特徴をいくつか挙げれば、「人から直接」に該当する変数群(変数1、2、3)からなるクラスターに、学校で行われた追悼行事や式典(変数6)が含まれたことである。また、「学校教育をつうじて」(変数4、5)にSNS、ブログ、ウェブページなどネットの情報ソース(変数11)が含まれたことである。また、「博物館やモニュメントをつうじて」に該当する変数群(変数14、13、17、12、15)からなるクラスターにノンフィクション出版物(変数8)が含まれた。これら以外については、概ね事前に予想したような5つのタイプの情報ソースを示すクラスター群が析出された。

つぎに、これらのクラスター群の相互関係をクラスター間の距離を手がかりにみていきたい。

まず、「学校教育をつうじて」と「メディアをつうじて」(変数7、9、10、)の2つの情報ソースのクラスターからなる第1のクラスターとして「教育メディア・コミュニケーション」クラスターが存在し、つぎに、それに「人から直接」得る情報ソースのクラスターである第2のクラスターとして「対人コミュニケーション」クラスターが近接

13 大震災に関する知識や情報の情報源は、学校教育が4分の3強を占め、最大の情報源となっている。これに対し、直接、被災者や家族から聞いた回答者は、2019年度調査では5割強を示したが、2020年度調査では3割程度に減少し、逆に、ノンフィクションの映像メディア(ドキュメンタリー映像など)から得た回答者が、5割強から7割弱へと増えた。他方、博物館や記念碑などをおして知った回答者は2割程度、記念行事をおして知った回答者も1割に満たなかった。

A. あなたは阪神・淡路大震災についての知識や情報を何から得ましたか？



図1

した。他方、「博物館やモニュメントをつうじて」得る情報ソースを示すクラスターと「追悼・記念行事をつうじて」得る情報ソースを示す2つのクラスター群からなる第3のクラスターとして、「展示/イベント・コミュニケーション」クラスターが存在した。

これらの3つのクラスター間の関係を見ると、つぎのようなことが言えるだろう。震災後世代の学生たちにおいては、学校教育をとおして大震災についての知識や情報を得た者は、同時に、メディアをとおして情報を得る傾向があり、また、被災者や家族など人間から直接知識や情報をえる傾向が認められた。つまり、直接的な対人コミュニケーション、学校における教育コミュニケーション、それにメディア・コミュニケーションという3つのコミュニケーションは大震災に関する知識や情報の獲得について相互連関が認められたのである。

他方、これに対して、各種団体が主催する行事やイベントをとおした知識や情報を獲得と博物館やモニュメントをとおした知識や情報の獲得にも、ゆるやかな相互連関関係が認められたが、これら2つの情報ソースは、あきらかに異なった情報源として存在していることがわかった。

ところで、これら大震災についての知識や情報を得るソースは、回答者の属性によってどのような特徴を示すのだろうか。

表2は、今回の調査では、回答者の属性として、年齢、性別、出生地、居住地、被災地での居住経験年数を尋ねた。回答者が大震災の知識や情報を得た情報ソースとこれらの属性とをクロス集計し、 χ^2 乗検定を施したとき、有意差の水準を示すP値を一覧で示したものが表2である。これを手がかりに、有意水準が $P < .001$ (有意差がある)と $P < .005$ (やや有意差がある)である場合を選び、クロス表で確認する作業を行った。

表2

情報源×属性クロス集計 χ^2 乗検定 P値

	性別	被災地で 出生	被災地に 現在居住	4年以上 被災地に居住	中核/周辺
(人から)					
1 大震災を経験した被災者から直接、話を聞いた	0.313	<.001	0.012	<.001	<.001
2 家族・親類(祖父母、両親、兄弟姉妹、親類の人々)から聞いた	0.048	<.001	0.786	0.021	0.037
3 友人との会話や議論をとおして知った	0.003	0.403	0.694	0.694	0.938
(学校で)					
4 学校の授業やホームルームで聞いた	0.013	0.006	0.260	<.001	0.003
5 学校で使った教科書から知った	0.412	0.309	0.790	0.271	0.540
6 学校で行われた追悼行事や式典をとおして知った	0.139	<.001	<.001	<.001	<.001
(ノンフィクション作品で)					
7 ノンフィクション映像作品(テレビドキュメンタリー、記録映画、ネット動画など)を観て知った	0.100	0.082	0.296	0.100	0.204
8 ノンフィクション出版物(新聞・雑誌記事、本や写真集など)を読んで知った	0.099	<.001	0.001	<.001	<.001
(フィクション作品で)					
9 フィクション映像作品(テレビドラマ、劇映画、ネット動画ドラマなど)を観て知った	0.476	0.037	0.721	0.324	0.241
10 フィクション出版物(文学作品、絵本、コミック本/雑誌など)を読んで知った	0.073	0.008	0.096	0.005	0.003
(ネットで)					
11 SNS、ブログ、ウェブページなどをとおして知った	<.001	0.374	0.387	0.992	0.425
(博物館や展示で)					
12 「人と防災未来センター」(神戸市中央区脇浜海岸通り)を訪問して知った	0.088	<.001	0.006	<.001	<.001
13 それ以外の博物館や展示物を観て知った	0.356	<.001	0.089	<.001	0.015
(史跡や記念碑で)					
14 「慰霊と復興のモニュメント」(神戸市中央区市役所南東遊園地内)を観て知った	0.452	<.001	0.001	<.001	<.001
15 神戸港メモリアルパーク(メリケン波止場)を観て知った	0.059	<.001	<.001	<.001	<.001
16 北淡震災記念公園を訪ねて知った	0.771	0.006	0.877	0.051	0.143
17 その他の記念碑やモニュメントを観て知った	0.052	0.002	0.025	0.010	0.008
(追悼行事や記念行事で)					
18 行政や公共団体が主催する行事で知った	0.818	<.001	0.001	<.001	<.001
19 地域の商店街や自治会などが主催する行事で知った	0.472	<.001	0.090	<.001	<.001
20 お寺や教会、神社などの宗教施設が主催する行事で知った	0.554	<.001	0.068	0.058	0.032
21 その他の行事やイベントで知った	0.361	0.195	0.713	0.809	0.912

その結果を以下にまとめる。

まず、性別に関しては、V11の「SNS、ブログ、ウェブページなどをとおして得た」と答えた回答者で、男性が女性に比べて、有意($P<.01$)に多いことがわかった。他方、V3の「友人との会話や議論をとおして知った」と回答した者は、女性の方が男性よりやや有意($P<.05$)に多かった。同様に、V4の「学校の授業やホームルームで聞いた」と回答した者は、女性の方が男性よりやや有意

($P<.05$)に多かった。

つぎに、出生地、現住地、被災地での居住経験年数については、個々の属性ごとにデータを分析するのではなく、以下のような方法でその包括的な特徴の分析を行った。

今回の調査は、大震災の被災地周辺の大学の学生を対象として実施された。このことは、回答者全体が、すでに大震災の記憶を次世代に継承してくれる動機やそれに必要な知識や情報源に触れる

機会を豊富にもっているかどうかという観点からみれば、大震災とほとんど関係をもたない他地域の学生たちと比較して、すくなくとも大震災の身近さにおいて、有意な位置にいてと考えてよい。

しかし、被災地の大学に学んでいるといっても、これら回答者の被災地との関わりの程度はそれぞれ異なっている。そこで、被災地との関わりの程度に影響を及ぼすであろうファクターとして、①対象者の出生地が大震災の被災地であるか、②現在の居住地が被災地であるか、そして、③被災地での比較的長い居住経験(4年以上)があるか、という3つのファクターをとりあげ、それらをもとに回答者群から2つのグループを抽出し、比較を試みた。2019年度の調査の回答者について、これら3つのファクターにもとづいて分類したのが、図3である。(ただし、無回答のケースは除いている。)

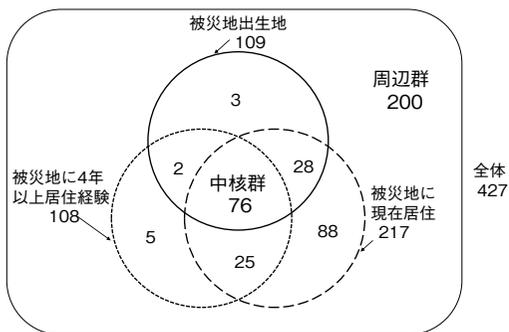


図3

まず、この図を説明しておきたい。①対象者の出生地が大震災の被災地で、②現在の居住地が被災地でさらに、③被災地での比較的長い居住経験(4年以上)がある回答者は76人だった。この最も被災地との関わりの強い群をここでは、「中核群」と呼び、逆に、この3つの条件のいずれをも満たさない群、つまり、もっとも被災地との関わりの薄い群を「周辺群」と呼ぶことにした。この2つの群を比較することで、回答者の被災地との関わり

による情報ソースの違いとその特徴がわかるはずである。

さて、具体的作業として、この2つの群とV1からV21までの情報ソースをクロス集計した。表2の最右の列はその際、析出されたP値を一覧したものである。

この表をみると、中核群は、「人から直接」、「学校教育」、「博物館やモニュメント」、「追悼・記念行事」の4つの情報リソースのすべてのタイプについて、周辺群に比べて、より多くの回答者が大震災の情報や知識を得ていることが分かる。

ただ、いくつか例外がある。一つは、情報ソースとしての「メディア」に関しては、映像系のメディア(V7、V9)と「インターネット」(V11)では、中核群と周辺群との間に、有意な差はみられなかった。また、「学校教育」についても、「教科書」は、中核群と周辺群に有意な差はみられず、また、「博物館やモニュメント」も、最大の被災地・神戸市から離れた淡路島にある「北淡震災記念公園」も含めて、中核群と周辺群で有意な差はみられなかった。一方、情報リソースとしての「メディア」についてみれば、「出版物」(V8、V10)に関しては、中核群が周辺群より有意に多数の回答者が情報を得ていた。

これらの結果から言えることは、被災地に近く被災経験に触れる機会が大きい中核群の学生たちは、直接、被災者から大震災について知ることができ、また、被災地に固有のモニュメントや博物館からも知識や情報を得る機会が多かったということである。他方、教科書、映像系メディア(テレビ、映画、ネット動画など)は、被災地や被災者へのアクセスがない周辺群の回答者にも、等しく知識や情報を提供していた。このように、震災後世代の情報接触に関する個別の条件に応じて、それぞれ異なった特性をもつ、知識や情報を伝える回路が存在し、機能していたのである。この事実を確認しておきたい。

ただ、周辺群に属する学生たちにとって、大震災の知識や情報はメディアをつうじて提供されてはいるものの、被災者から、直接、話を聞いたり、現地を訪ねてモニュメントや記念碑に触れたり、追悼行事に参加して被災の歴史に思いをはせる機会は必ずしも多くはない。被災地周辺で暮らす中核群の震災後世代たちだけではなく、周辺群の人たちに大震災の記憶を伝える、メディア以外の回路をいかに確保していくのかという課題がここから浮上してくるだろう。

B-2. 震災後世代は大震災についてのどんな事象に関心があり、語り継ぐ必要があると考えているか

震災後世代が大震災の記憶継承について動機づけられるとすれば、その前提として、大震災に対する何らかの関心の存在があるはずである。しかし、それと並行して、もし大震災の記憶を語り継ぐとするなら、何を語り継ぐ必要があるかと考えるだろう。この大震災に対する「関心」と記憶継承への「必要性認知」の2つの要素は必ずしも重なり合っているとは限らない。そこで、2019年度の調査では、この2つの要素をそれぞれ11の項目(V22～V32)を設けて質問した。

個々の項目についての「関心」と「必要感」についてはすでに報告しているが、ここで簡単に概観しておく。

まず、もっとも関心が高かった事象は、「将来の防災に役立つような教訓や知識」(-2～+2の5段階評価で1.37)であった。これについて、第2に関心が高かった事象は、「震災直後の避難誘導、応急医療、水や食糧の配布などの支援活動」(同1.26)、第3に関心が高かった事象は、震災直後の人命救助、消火など救命救急活動」(同1.13)についてであった。一方、「亡くなった個人の記録やエピソードなど」(同0.74)への関心はもっとも低かった。これに続いて、「道路、港湾施設、水道・

電気・ガスなどのインフラ施設の被災状況、復旧の過程など」(同0.80)についての関心も低かった。「被災者個人の大震災に対する見解や震災後の生き方」(同0.83)についての関心がこれに続いて低かった。

他方、継承すべき記憶に関しては、「将来の防災に役立つ教訓や知識など」(-2～+2の5段階評価で1.72)や「震災直後の避難誘導、応急医療、水や食糧の配布などの支援活動」(同1.66)など、防災や減災について実用性の高い知識や情報に関する項目の記憶について語り継ぐ必要性は高く、反対に、「亡くなった人の個人の記録やエピソード」(同1.02)や「被災者個人の大震災に対する見解や震災後の生き方」(同1.26)など人間的なエピソードなどについては相対的に語り継ぐ必要性は低いという回答者の態度が認められた。震災後世代による記憶継承について、いわば「選択的継承」という傾向がみられたのである。

本論文では、それを基礎として、さらに分析を進めた。

これら11の項目(V22～V32)について、質問紙では、「関心」と「必要感」を持つかどうかについて、回答者に「そう思う」～「そう思わない」までの5段階尺度で回答を求めたが、これらすべての項目を対象に因子分析を試みた。因子数の抽出は、主因子法、プロマックス回転を使用し、因子数は寄与率が累積で70%を超えるまでとし、それぞれ3因子を抽出した。

表4は「関心」、表5は「必要性認知」について、それぞれの因子の11変数に対する因子負荷量を示したものである。

さて、これら因子負荷量を参考にしながら、因子の解釈を行った。

まず、表4から、回答者たちが大震災のどのような事象に関心を持っているかについて、第1因子は、被災者個人の生き方(V30)、犠牲者のエピソード(V29)、ボランティアなどの活動(V31)、

表4

B. 阪神・淡路大震災の以下のような項目について、あなたの関心の程度

	因子1	因子2	因子3
V30 被災者個人の大震災に対する見解や震災後の生き方など	1.0063	-0.1379	0.0193
V29 亡くなった個人の記録やエピソードなど	0.7384	0.0488	-0.1523
V31 被災地で活動したボランティアや市民団体の活動や経験	0.5853	0.2212	0.0215
V32 意思疎通の障害や異文化の背景をもつ「災害弱者」の経験や困難など	0.5618	0.0946	0.1827
V26 震災直後の避難誘導、応急医療、水や食糧の配布などの支援活動	-0.0964	0.9379	-0.0382
V25 震災直後の人命救助、消火など救命救急活動	-0.0237	0.7094	0.1110
V27 避難所や仮設住宅での被災者の生活の苦労や工夫など	0.1404	0.6984	-0.0151
V28 将来の防災に役に立つような教訓や知恵など	0.1454	0.5244	0.0416
V23 道路、港湾施設、水道・電気・ガスなどのインフラ施設の被災状況、復旧の過程など	-0.1133	-0.0122	0.9328
V24 個人の住宅や建物の被害状況、再建の過程など	0.0521	0.0605	0.7207
V22 全体として阪神・淡路大震災	0.1640	0.3148	0.2928

表5

C. あなたは阪神・淡路大震災のどんな記憶を語り継ぐ必要があると思いますか。

	因子1	因子2	因子3
V36 震災直後の避難誘導、応急医療、水や食糧の配布などの支援活動	1.0014	-0.1739	0.0261
V38 将来の防災に役に立つような教訓や知恵など	0.7963	0.0906	-0.1137
V35 震災直後の人命救助、消火など救命救急活動	0.6667	-0.0382	0.2490
V37 避難所や仮設住宅での被災者の生活の実情や苦労など	0.5079	0.2565	0.1336
V40 被災者個人の大震災に対する見解や震災後の生き方など	0.0705	0.8903	-0.1152
V39 亡くなった個人の記録やエピソードなど	-0.2679	0.7989	0.1502
V41 被災地で活動したボランティアや市民団体の活動や経験	0.2700	0.5845	-0.0165
V42 意思疎通の障害や異文化の背景をもつ「災害弱者」の経験や困難など	0.2609	0.5210	0.0706
V34 個人の住宅や建物の被害状況、再建の過程など	-0.0485	0.0893	0.8823
V33 道路、港湾施設、水道・電気・ガスなどのインフラ施設の被災状況、復旧過程など	0.2106	-0.0363	0.6435

災害マイノリティの経験(V32)など、被災者個人の経験や生き方、市民のボランティア活動への関心と深い連関を示していた。これを「被災者指向」の関心因子と名付けておく。

つぎに第2因子は、直後の避難や支援活動(V26)、直後の救命救急救助(V25)、避難所や仮設住宅での生活(V27)、防災への教訓(V28)など、災害医療や食料配布、避難所や仮設住宅など被災地支援への関心と深い関連を示した。これを「救援活動指向」の関心因子と名付ける。

最後に、第3因子は、インフラ施設の復興(V23)、住宅再建(V24)など、道路や電気、住宅

などインフラの復旧や再建への関心と深い関連を示した。これを「復興指向」の関心因子と名付ける。

つぎに表5から、回答者たちが大震災のどのような記憶を語り継ぐ必要があると認識しているかについて、第1因子は、直後の避難や支援活動(V36)、防災への教訓(V38)、直後の救命救急救助(V35)、避難所や仮設住宅での生活(V37)など、救命救急、医療や食料、避難所など救援活動についての記憶継承と深い関連を示した。これを「継承すべき記憶」の「救援活動指向」因子と名付ける。

つぎに第2因子は、被災者個人の生き方(V40)、犠牲者のエピソード(V39)、ボランティアなどの

表6

	B 阪神・淡路大震災についての関心			C 継承する必要がある記憶		
	被災者指向	救援活動指向	インフラ復興指向	救援活動指向	被災者指向	インフラ復興指向
	B因子1	B因子2	B因子3	C因子1	C因子2	C因子3
B 阪神・淡路大震災についての関心						
(被災者指向) 被災者個人の経験や生き方、市民のボランティア活動への関心	B因子1	1.0000 - 0.7572 *	0.6804 *	0.4197 *	0.5603 *	0.3879 *
(救援活動指向) 災害医療や食料配布、避難所や仮設住宅など被災地支援への関心	B因子2		1.0000 - 0.8290 *	0.5329 *	0.4113 *	0.4455 *
(インフラ復興指向) 道路や電気、住宅などインフラの復旧や再建への関心	B因子3		1.0000 -	0.4269 *	0.3931 *	0.4237 *
C 継承する必要がある記憶						
(救援活動指向) 救命救急、医療や食料、避難所など救援活動についての記憶継承が必要	C因子1			1.0000 -	0.6786 *	0.7472 *
(被災者指向) 被災者の経験やボランティア市民活動についての記憶継承が必要	C因子2				1.0000 -	0.6941 *
(インフラ復興指向) 住宅や道路、水道などインフラの被災状況や復旧についての記憶継承が必要	C因子3					1.0000 -

*: P<.001 相関がある 強い相関がある

活動(V41)、災害マイノリティの経験(V42)など、被災者の経験やボランティア市民活動についての記憶継承と深い連関を示していた。これを「継承すべき記憶」の「被災者指向」因子と名付けておく。そして、第3の因子は、住宅再建(V34)、インフラ施設の復興(V33)など、住宅や道路、水道などインフラの被災状況や復旧についての記憶継承と深い連関を示した。これを「継承すべき記憶」の「復興指向」因子と名付ける。

これら2つの表の解釈からも明らかなように、震災後世代の大震災に関する関心の対象と記憶を継承すべき対象は、対称的關係にあることが分かる。そして、これら関心の対象に関する因子と継承すべき記憶に関する因子との間にどのような関係があるかを知るため、これら3対の因子から析出された回答者各個人ごとの因子得点をもとにして相関分析を行った。表6は、その結果である。

この表6からはつぎのようなことが分かる。「被災者指向」関心因子は「継承すべき記憶」の「被災者指向」因子と相関を示し、また、「支援活動指向」関心因子は、「継承すべき記憶」の「救援指向」因子と相関が認められた。つまり、大震災について被災者やボランティア活動など人間的要素に関心

のある者は、同じく被災者やボランティア活動など人間的要素について記憶継承する必要があると考え、また、救命救急、医療や食料、避難所など救援活動について関心を示す者は、同様に救援活動についての記憶を継承する必要があると考えているわけである。

ただし、「被災者指向」関心因子と「救援活動指向」関心因子は、強い相関性をもっており、同時に、「インフラ復興指向」関心因子とも相関性を示した。ただ、「救援活動指向」関心因子は「インフラ復興指向」関心因子とも強い相関関係を示した。

他方、「継承すべき記憶」の「救援活動指向」因子は、「継承すべき記憶」の「インフラ復興指向」因子と強い相関性を示したが、「継承すべき記憶」の「被災者指向」との相関性はそれより弱かった。これが示唆するのは、災害医療や食料配布、避難所や仮設住宅など被災地支援の記憶継承を必要と考える者は、同時にインフラ復興の記憶継承を必要だと考える傾向があるということである。

つぎに、この大震災への「関心」と「継承すべき記憶」の2つの因子群が回答者の属性とどのような関係を持つかについて分析を加えた。

表7は、回答者の属性(性別、被災地での居住経

表7

性別		t値	自由度	p値	平均差
B阪神・淡路大震災についての関心					
(被災者指向) 被災者個人の経験や生き方、市民のボランティア活動への関心	B因子1	0.598	310.566	0.55	0.06
(救援活動指向) 災害医療や食料配布、避難所や仮設住宅など被災地支援への関心	B因子2	-1.832	294.483	0.068	-0.185
(インフラ復興指向) 道路や電気、住宅などインフラの復旧や再建への関心	B因子3	-0.879	308.494	0.38	-0.086
C継承する必要がある記憶					
(救援活動指向) 救命救急、医療や食料、避難所など救援活動についての記憶継承が必要	C因子1	-2.612	226.305	*0.01	-0.289
(被災者指向) 被災者の経験やボランティア市民活動についての記憶継承が必要	C因子2	-2.034	260.637	0.043	-0.21
(インフラ復興指向) 住宅や道路、水道などインフラの被災状況や復旧についての記憶継承が必要	C因子3	-0.883	273.058	0.378	-0.09

*: $p<0.05$ **: $p<0.01$

被災地に4年以上居住		t値	自由度	p値	平均差
B阪神・淡路大震災についての関心					
(被災者指向) 被災者個人の経験や生き方、市民のボランティア活動への関心	B因子1	-1.558	179.015	0.121	-0.169
(救援活動指向) 災害医療や食料配布、避難所や仮設住宅など被災地支援への関心	B因子2	-2.475	173.495	*0.014	-0.267
(インフラ復興指向) 道路や電気、住宅などインフラの復旧や再建への関心	B因子3	-1.941	164.524	0.054	-0.213
C継承する必要がある記憶					
(救援活動指向) 救命救急、医療や食料、避難所など救援活動についての記憶継承が必要	C因子1	-2.691	271.349	**0.008	-0.245
(被災者指向) 被災者の経験やボランティア市民活動についての記憶継承が必要	C因子2	-1.738	192.491	0.084	-0.18
(インフラ復興指向) 住宅や道路、水道などインフラの被災状況や復旧についての記憶継承が必要	C因子3	-1.147	224.92	0.252	-0.11

*: $p<0.05$ **: $p<0.01$

出生地が被災地		t値	自由度	p値	平均差
B阪神・淡路大震災についての関心					
(被災者指向) 被災者個人の経験や生き方、市民のボランティア活動への関心	B因子1	-0.745	212.307	0.457	-0.077
(救援活動指向) 災害医療や食料配布、避難所や仮設住宅など被災地支援への関心	B因子2	-1.766	202.344	0.079	-0.184
(インフラ復興指向) 道路や電気、住宅などインフラの復旧や再建への関心	B因子3	-1.085	202.064	0.279	-0.111
C継承する必要がある記憶					
(救援活動指向) 救命救急、医療や食料、避難所など救援活動についての記憶継承が必要	C因子1	-3.073	304.028	**0.002	-0.273
(被災者指向) 被災者の経験やボランティア市民活動についての記憶継承が必要	C因子2	-1.738	220.466	0.084	-0.172
(インフラ復興指向) 住宅や道路、水道などインフラの被災状況や復旧についての記憶継承が必要	C因子3	-1.182	245.839	0.239	-0.112

*: $p<0.05$ **: $p<0.01$

現在、被災地に居住		t値	自由度	p値	平均差
B阪神・淡路大震災についての関心					
(被災者指向) 被災者個人の経験や生き方、市民のボランティア活動への関心	B因子1	-1.558	179.015	0.121	-0.169
(救援活動指向) 災害医療や食料配布、避難所や仮設住宅など被災地支援への関心	B因子2	-2.475	173.495	*0.014	-0.267
(インフラ復興指向) 道路や電気、住宅などインフラの復旧や再建への関心	B因子3	-1.941	164.524	0.054	-0.213
C継承する必要がある記憶					
(救援活動指向) 救命救急、医療や食料、避難所など救援活動についての記憶継承が必要	C因子1	-2.691	271.349	**0.008	-0.245
(被災者指向) 被災者の経験やボランティア市民活動についての記憶継承が必要	C因子2	-1.738	192.491	0.084	-0.18
(インフラ復興指向) 住宅や道路、水道などインフラの被災状況や復旧についての記憶継承が必要	C因子3	-1.147	224.92	0.252	-0.11

*: $p<0.05$ **: $p<0.01$

験、出生地、現住地)をそれぞれ2つのカテゴリー(性別:女性1か男性2か、出生地:被災地で出生1か否2か、被災地での居住経験:4年以上の居住

経験がある1かない2か、現住地:被災地に現住1か否2か)で分け、2つのグループ間の平均差検定(T-test)を行った結果を一覧したものである。

この表に示される結果から次のような知見を得ることができた。

性別に関しては、「継承すべき記憶」における「救援活動指向」因子と「救援活動指向」関心因子に関して、女性が男性より平均値が有意に高かった。つまり、大震災について、男性の回答者は、救命救急、医療や食料、避難所など救援活動についてより高い関心を示す傾向が見られたのである。また、「継承すべき記憶」においても、男性が女性より、救命救急、医療や食料、避難所など救援活動についての記憶を継承する必要があると考える傾向があることを示したのである。

つぎに、出生地との関係を見ると、出生地が被災地である回答者は、そうでない回答者より、「継承すべき記憶」における「救援活動」因子について因子得点の平均値に有意な差があることがわかった。つまり、被災地で生まれた者は、「継承すべき記憶」として、救命救急、医療や食料、避難所など救援活動をより選択する傾向が認められたのである。

また、現住地との関係では、被災地に現住する回答者は、そうでない回答者より、大震災に関する関心では「救援活動指向」因子で、因子得点の平均値で有意な差があることを示す一方、「継承すべき記憶」における「救援活動指向」因子についても因子得点の平均値に有意な差があることを示した。これは、被災地での居住経験(4年以上)についても、同様の結果を示した。つまり、この結果は、被災地に現住する者、あるいは、被災地に4年以上住んだ経験のある者は、大震災について、救命救急、医療や食料、避難所など救援活動により多くの関心を示し、救命救急、医療や食料、避難所など救援活動の記憶の継承をより多く必要と考える傾向をもつということである。

これら属性が異なると、大震災に対する関心の傾向が異なり、また、継承する必要があると感じる記憶の内容が異なる傾向があるのは、すでに単

純集計の分析でも明らかになっているように、震災後世代が大震災の記憶を継承する際に、継承すべき記憶に対して選択的であること、つまり「災害記憶の選択的継承」という傾向が存在することを示唆するものであった。

B-3. 大震災やその記憶継承に関する震災後世代の意識や態度

回答者である震災後世代の学生たちに、18(V43~V60)の質問項目を用意して、大震災やその記憶継承についての意識や態度を質問した。これらの質問に対する回答者の反応に関して、単純集計の結果とその考察は、すでに報告されている。本論では、これら18の変数について、因子分析を行った。因子数の抽出は、主因子法、プロマックス回転を使用し、因子数は固有値>1の範囲とし、5因子を抽出した。

表8は、大震災やその記憶継承についての回答者の意識や態度に関して、抽出されたそれぞれの因子の、18変数に対する因子負荷量を示したものである。これらの因子負荷量を参考にしながら、因子の解釈を行う。

第1因子(D因子1)は、「大震災について記憶の継承については、被災者の感情や思いの継承にこそ力を入れるべきだ」(V47)、「大震災の被災者の個人的な経験や記憶は、将来の防災に役立たなくても記録して残すべきだ」(V49)、「大震災の被災者の個人的な経験や記憶は、将来の防災に役立たなくても記録して残すべきだ」(V52)の変数との相関性が強かった。この因子は、防災などの有用性より被災者の感情や思い、経験それ自体の記憶の継承を重視する傾向を示すものであり、この因子を「被災者の経験重視指向」因子と呼ぶことにしたい。

第2因子(D以内2)は、「行政や地方公共団体は、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている」(V45)、「市民やボランティア団体は、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝え

表8

D. 次のような意見があります。あなたの共感の程度

		D因子1	D因子2	D因子3	D因子4	D因子5
V47	大震災について記憶の継承については、被災者の感情や思いの継承にこそ力を入れるべきだ	0.7157	0.0414	-0.0269	-0.1392	0.1359
V49	大震災の被災者の個人的な経験や記憶は、将来の防災に役立つなくても記録して残すべきだ	0.5986	-0.0220	-0.0378	-0.0289	0.0975
V52	大震災の被害から力強く立ち直った被災者や被災地のエピソードをもっと伝えるべきだ	0.5907	0.0375	0.0309	-0.0224	-0.0053
V45	行政や地方公共団体は、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている	0.0621	0.9061	0.0298	0.0314	-0.0400
V46	市民やボランティア団体は、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている	0.1962	0.7266	0.0178	-0.0388	-0.1578
V44	マスメディアは、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている	-0.1302	0.6807	-0.0665	0.1761	0.1335
V54	大震災で傷ついたり、亡くなったりした人の悲しい話はできれば聞きたくない	-0.1734	-0.0220	0.8872	0.0685	-0.0563
V53	震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい	-0.0387	0.0990	0.5436	-0.1806	0.1996
V55	復興過程で生じた社会問題などを広く伝えることは必要だ	0.2754	-0.0935	-0.0500	0.6398	0.0052
V56	将来の防災に役立つかどうかを見極めて、役に立つ情報や知識を優先して伝えるべきだ	-0.0621	0.0389	0.0786	0.5533	0.1580
V43	阪神・淡路大震災の被災地は、おおむね復興をとげている。	-0.1882	0.2847	0.0156	0.5082	-0.0023
V51	災害からの復興を進めるためには、できるかぎり災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に作り変えるのがよい	0.0468	-0.0509	0.0610	0.0414	0.7825
V48	大震災についての記憶の継承については、データに基づく客観的な情報の継承にこそ力を入れるべきだ	0.0971	0.0111	-0.0089	0.2925	0.3868
V50	大震災で亡くなった人の家族や友人を悲しませないために、犠牲者個人の話題は触れない方がよい	0.0897	-0.0334	0.4859	0.1334	0.2921
V57	大きな災害の被害を物語る象徴的な被災建築物や遺物は、たとえ辛い記憶を思い起こさせても残すべきだ	0.2251	0.0644	-0.0200	0.1281	-0.0215
V58	被災者の不正や被災地での犯罪など、支援や復興の妨げになる都合の悪い情報は隠されている	0.1548	-0.1372	0.4682	0.1536	-0.2337
V59	震災を知らない世代でも、大震災の記憶や経験を将来に伝える責任がある	0.4961	0.0128	-0.0172	0.2100	-0.1314
V60	あなたの学んでいる大学は、阪神・淡路大震災の被害や歴史について伝える努力をしている	0.2774	0.1080	0.2984	-0.1538	0.0478

る取り組みを十分に行っている」(V46)、「マスメディアは、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている」(V44)との相関性が強かった。この因子は、行政やメディア、市民活動などが行っている大震災の記憶継承活動に対する信頼や評価に関わっており、それを「記憶継承社会活動への信頼指向」因子と呼ぶことにしたい。

第3因子(D因子3)は、「大震災で傷ついたり、亡くなったりした人の悲しい話はできれば聞きたくない」(V54)、「震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい」(V53)の変数との相関性が強かった。この因子は、被災者や被災地に

おける否定的な情報や記憶に対して忌避する傾向に関連しており、それを「否定的記憶への忌避指向」因子と呼ぶことにしたい。

第4因子(D因子4)は、「復興過程で生じた社会問題などを広く伝えることは必要だ」(V55)、「将来の防災に役立つかどうかを見極めて、役に立つ情報や知識を優先して伝えるべきだ」(V56)、「阪神・淡路大震災の被災地は、おおむね復興をとげている。」(V43)の変数との相関性が強かった。この因子は、被災地の復興を肯定し、それに至る過程を伝えることや復興に有益な情報や知識の継承への積極性に関わっており、それを「復興に役立つ記憶重視指向」因子と呼ぶことにしたい。

表9

性別		t値	自由度	p値	平均差	標準偏差
「被災者の経験重視指向」	D因子1	0.112	286.339	0.911	0.011	0.095
「記憶継承社会活動への信頼指向」	D因子2	1.387	319.288	0.166	0.136	0.098
「否定的記憶への忌避指向」	D因子3	1.3	272.525	0.195	0.13	0.1
「復興に役立つ記憶重視指向」	D因子4	-1.304	275.529	0.193	-0.12	0.092
「被災痕跡刷新指向」	D因子5	2.252	282.992	0.025	0.209	0.093

出生地		t値	自由度	p値	平均差	標準偏差
「被災者の経験重視指向」	D因子1	-2.147	178.7	0.033	-0.221	0.103
「記憶継承社会活動への信頼指向」	D因子2	-2.031	192.674	0.044	-0.217	0.107
「否定的記憶への忌避指向」	D因子3	-1.002	175.293	0.318	-0.109	0.109
「復興に役立つ記憶重視指向」	D因子4	0.937	206.839	0.35	0.087	0.092
「被災痕跡刷新指向」	D因子5	-1.001	182.365	0.318	-0.1	0.1

居住地		t値	自由度	p値	平均差	標準偏差
「被災者の経験重視指向」	D因子1	-1.478	380.886	0.14	-0.133	0.09
「記憶継承社会活動への信頼指向」	D因子2	-2.293	380.309	0.022	-0.22	0.096
「否定的記憶への忌避指向」	D因子3	0.29	379.802	0.772	0.027	0.093
「復興に役立つ記憶重視指向」	D因子4	-0.129	373.997	0.898	-0.011	0.085
「被災痕跡刷新指向」	D因子5	-0.54	373.671	0.59	-0.047	0.088

居住経験		t値	自由度	p値	平均差	標準偏差
「被災者の経験重視指向」	D因子1	-2.464	162.903	0.015	-0.26	0.105
「記憶継承社会活動への信頼指向」	D因子2	-1.294	170.3	0.197	-0.143	0.111
「否定的記憶への忌避指向」	D因子3	-0.085	164.14	0.932	-0.009	0.109
「復興に役立つ記憶重視指向」	D因子4	0.196	187.288	0.845	0.018	0.094
「被災痕跡刷新指向」	D因子5	0.992	163.086	0.323	0.102	0.103

被災者が身近にいる		t値	自由度	p値	平均差	標準偏差
「被災者の経験重視指向」	D因子1	-0.723	364.234	0.47	-0.066	0.091
「記憶継承社会活動への信頼指向」	D因子2	0.158	368.556	0.874	0.015	0.098
「否定的記憶への忌避指向」	D因子3	0.535	370.353	0.593	0.049	0.092
「復興に役立つ記憶重視指向」	D因子4	2.302	364.451	0.022	0.199	0.086
「被災痕跡刷新指向」	D因子5	0.354	370.077	0.723	0.031	0.087

第5因子(D因子5)は、「災害からの復興を進めるためには、できるかぎり災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に作り変えるのがよい」(V51)と高い相関性を示した。この因子を「被災痕跡刷新指向」因子と呼ぶことにしたい。

これらの因子と属性との関連を次に見ておきたい。表9は、B-2でも用いたそれぞれの因子についての回答者の因子得点を属性ごとに平均差検定(T-test)を行った結果である。

まず、性別についての結果では、「被災痕跡刷

新指向」因子(因子5)について、男性が女性より刷新指向が有意($P<0.05$)に強いことが分かった。つぎに、出生地に関しては、被災地出身の方が非出身者より、「被災者の経験重視指向」因子と「記憶継承社会活動への信頼指向」因子において、よりそれらの傾向を有意($P<0.05$)に示す傾向があることが分かった。また、居住地については、現在、被災地に居住する回答者は、被災地に現住しない回答者より、「記憶継承社会活動への信頼指向」因子において、より有意($P<0.05$)に信

表10

		D 大震災の認識や大震災の記憶継承についての意見				
		被災者の 経験重視 指向	記憶継承社 会活動への 信頼指向	否定的記憶 忌避指向	復興に役立 つ記憶重 視指向	被災痕跡 刷新指向
		D因子1	D因子2	D因子3	D因子4	D因子5
B 大震災についての関心						
(被災者指向) 被災者個人の経験や生き方、市民のボランティア活動への関心	B因子1	相関係数 0.486 P値 <.001	0.056 0.273	-0.016 0.751	0.217 <.001	-0.035 0.493
(救済活動指向) 災害医療や食料配布、避難所や仮設住宅など被災地支援への関心	B因子2	相関係数 0.392 P値 <.001	0.017 0.734	-0.048 0.345	0.324 <.001	-0.11 0.031
(インフラ復興指向) 道路や電気、住宅などインフラの復旧や再建への関心	B因子3	相関係数 0.386 P値 <.001	0.028 0.592	0.078 0.127	0.296 <.001	-0.006 0.912
C 継承する必要性のある記憶						
(救済活動指向) 救命救急、医療や食料、避難所など救済活動についての記憶継承が必要	C因子1	相関係数 0.38 P値 <.001	0.059 0.25	-0.09 0.078	0.433 <.001	-0.134 0.008
(被災者指向) 被災者の経験やボランティア市民活動についての記憶継承が必要	C因子2	相関係数 0.545 P値 <.001	0.087 0.088	-0.01 0.846	0.261 <.001	-0.02 0.692
(インフラ復興指向) 住宅や道路、水道などインフラの被災状況や復旧についての記憶継承が必要	C因子3	相関係数 0.379 P値 <.001	0.075 0.144	0.006 0.909	0.361 <.001	-0.035 0.49
D 大震災の認識や大震災の記憶継承についての意見						
(被災者の経験重視指向) 防災などの有用性より被災者の感情や思い、経験それ自体の記憶の継承を重視	D因子1	相関係数 — P値 —	0.36 <.001	0.09 0.078	0.378 <.001	0.151 0.003
(記憶継承社会活動への信頼指向) 行政やメディア、市民活動が行っている大震災の記憶継承活動に対する信頼	D因子2	相関係数 — P値 —	— —	0.229 <.001	0.109 0.032	0.346 <.001
(否定的記憶忌避指向) 被災者や被災地における否定的な情報や記憶に対する忌避	D因子3	相関係数 — P値 —	— —	— 0.014	-0.125 0.014	0.65 <.001
(復興に役立つ記憶重視指向) 被災地の復興を肯定し、復興に有益な情報や知識の継承への積極性	D因子4	相関係数 — P値 —	— —	— —	— —	-0.263 <.001
(被災痕跡刷新指向) 災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に刷新	D因子5	相関係数 — P値 —	— —	— —	— —	— —

■ 弱い相関がある ■ 相関がある

頼傾向をしめす傾向があり、また、居住経験については、4年以上被災地に居住経験のある回答者は、ない回答者より、「被災者の経験重視指向」因子においてより有意($P<.05$)に被災者の経験を重視する傾向が強いことが分かった。また、被災者が家族・親類・友人など身近にいると答えた回答者は、身近にいない回答者より、「復興に役立つ記憶重視指向」因子において、有意($P<.05$)に復興に役立つ記憶を重視する傾向を持つことが分かった。以上が、属性によって、大震災やその記憶継承についての意識や態度にかかわる諸因子がどのように関係しているかについての分析結果である。

つぎに、これらの因子群と、すでに抽出されて

いる大震災のどんな事象に関心をもつかに関する因子群(B因子1~B因子3)、さらに、大震災のどんな記憶を継承すべきかについての因子群(C因子1~C因子3)との間で、相関分析を行った。表10は、その結果である。

表10に示される結果を見てみたい。

まず、析出された、大震災やその記憶継承についての意識や態度に関する5つの因子間の相関については、防災などの有用性より被災者の感情や思い、経験それ自体の記憶の継承の重視に関わる第1因子(D因子1)が、行政やメディア、市民活動が行っている大震災の記憶継承活動に対する信頼に関係する第2因子(D因子2)、被災地の復興を肯定し、復興に有益な情報や知識の継承への積極性

に関わる第4因子(D因子4)の間に弱い相関が認められた。また、行政やメディア、市民活動が行っている大震災の記憶継承活動に対する信頼に関わる第2因子と、災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に刷新する指向と関わる第5因子との間に、弱い相関が認められた。また、被災者や被災地における否定的な情報や記憶を忌避する傾向に関わる第3因子(D因子3)は、災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に刷新した方がよいという傾向にかかわる第5因子(D因子5)と相関性を示した。

つぎに、この大震災やその記憶継承についての意識や態度に関する5つの因子(D因子1～D因子5)と、大震災についての関心の対象に関わる因子群(B因子1～B因子3)、並びに、継承すべき必要のある記憶に関わる因子群(C因子1～C因子3)との間の相関分析についての結果からは、つぎのようなことが分かった。

まず、防災などの有用性より被災者の感情や思い、経験それ自体の記憶の継承の重視に関わる第1因子(D因子1)は、被災者の経験やボランティア市民活動についての記憶継承が必要とする傾向に関わる因子(C因子2)との間に、相関が認められた。と同時に、大震災についての関心の対象にかかわるすべての因子(B因子1、B因子2、B因子3)のいずれとも弱い相関性が認められた。また、被災地の復興を肯定し、復興に有益な情報や知識の継承への積極性に関わる第4因子(D因子4)は、災害医療や食料配布、避難所や仮設住宅など被災地支援への関心にかかわる因子(B因子2)、救命救急、医療や食料、避難所など救援活動についての記憶継承の必要性の認識に関わる因子(C因子1)、住宅や道路、水道などインフラの被災状況や復旧についての記憶継承の必要性の認識に関わる因子(C因子3)と弱い相関性を示した。

これらの結果から次のようなことが分かった。

まず、被災地が出生地であったり、また、被災

地での居住経験が長かったり、身近に被災経験者がいる震災後世代の若者は、被災者の心情や経験を語り継ぐことに意義を認識し、また、現在の被災地が復興を遂げ、そこに至る経過の記憶を継承することに積極的な傾向があることが分かった。そして、これらの人々は、メディアや市民、行政などの社会組織が大震災の記憶継承に果たしてきた役割に対して肯定的に評価する傾向を持つといえる。ただ、男性は女性より「被災痕跡刷新指向」因子について、有意に災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に作り変えるのがよいと考える傾向を示した。これを逆にみれば、女性の方が男性より、災害の痕跡を残すことに肯定的であると考えてよいだろう。

また、大震災の記憶継承について、被災者の感情や思い、記憶を残すことに強い動機づけをもつ者は、大震災についての関心も、被災者個人の生き方や人生、またボランティアなどの市民活動などの人間的側面だけでなく、災害時の人命救助や医療支援、避難所や仮設住宅での生活、道路や水道、電力などのインフラの復興過程など、大震災についての多岐な側面に強い関心をもつ傾向を示した。そして、それらの記憶の中でも、被災者の経験や活動などの人間的側面についてより有意に継承すべきであるという意識を持っていることが分かった。

B-4. 震災後世代は大震災の経験や記憶を伝える

るためにどんな手段が効果的だと思うか

さて、震災後世代の回答者たちは、大震災の記憶や経験を伝えるために、どんな手段が効果的だと考えているのだろうか。この間は、言い換えてみれば、大震災を知らない自分たちにとって、どんな手段で伝えてもらうのが適当だと考えているかと問うことでもあった。単純集計の結果は、すでに報告されているが、簡単に概観しておく。

まず、回答者が記憶の継承について効果的だと

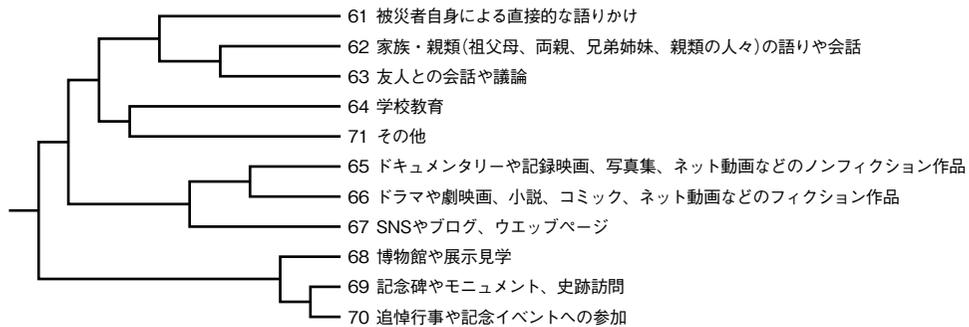


図11

みなす手段としては、「学校教育」が1位(76.4%)、2位が「被災者自身による語りかけ」(68.8%)で、これに「ノンフィクション作品」(57.1%)と「家族の会話」(52.1%)が続いた。50%を超える項目は、この4つであった。記憶継承手段として「学校教育」の評価が大きかった。

本論では、回答者たちが複数選択方式で選んだ、これら効果的と思われる手段について、クラスター分析を行った。分析法としては、ワード法を採用し、結果、析出されたクラスターを図11のデンドログラムとして描出した。

この図をみれば分かるように、伝える手段のタイプにしたがって、被災者による語りかけや家族や友人の語りや会話など直接的な対人的コミュニケーションによる手段、学校における教育コミュニケーションによる手段、記録映像や小説、ネットなどメディア・コミュニケーションによる手段、博物館や記念碑訪問、追悼行事参加などのイベント・コミュニケーションによる手段のクラスターの4つのクラスターが析出され、つぎに、それらのクラスターごとの関係が、さらに上位のクラスターによって示されるところとなった。つまり、直接的な対人コミュニケーションは学校による教育コミュニケーションとのクラスターにまとめられ、そのクラスターは、つぎにメディア・コミュニケーションとのクラスターにまとめられ

た。それらとは別に、博物館や記念碑訪問などのイベント・コミュニケーションは、それらとは独立性の高いクラスターを形成したのである。

回答者の属性によって、効果的だと考える大震災の記憶を伝える手段に差異があるかを次にみてみたい。本論では、大震災の記憶を伝える10の手段と回答者の属性とのクロス集計分析を行った。その結果に関して、 χ^2 乗検定を行い、属性による有意差が認められた結果だけを表にしたものが、表12(12-1~12-13)である。

表12から次のような知見を得ることができる。

まず、家族・親類(祖父母、両親、兄弟姉妹、親類の人々)の語りや会話を大震災の記憶と伝える手段として効果的だと考える回答者は、出生地が被災地である回答者に有意($P<.05$)に多く、また、同様に、知り合いに被災者がいる回答者にも有意($P<.05$)に多かった。また、友人との会話や議論が効果的な手段だと答えた回答者は、出生地が被災地である回答者に有意($P<.05$)に多かった。つぎに、学校教育が効果的な手段だと答えた回答者は、出生地が被災地の回答者に有意($P<.05$)に多く、同様に、被災地に4年以上居住経験のある回答者も有意($P<.05$)に多かった。つぎに、ドキュメンタリーや記録映画、写真集、ネット動画などのノンフィクション作品を効果的な手段だと答えた回答者は、男性より女性に有意

表12

クロス集計表

V62		出生地		合計
		1 被災地	2 被災地外	
1 家族・親類(祖父母、両親、兄弟姉妹、親類の人々)の語りや会話	実数	72	158	230
	%	61.017%	48.916%	52.154%
0 非選択	実数	46	165	211
	%	38.983%	51.084%	47.846%
合計	実数	118	323	441
	%	100%	100%	100%

χ²乗検定

	χ ² 乗値	自由度	p値
X ² 総数	5.071 441	1	0.024

クロス集計表

V62		知り合いに被災者がいる		合計
		1 いる	2 いない	
1 家族・親類(祖父母、両親、兄弟姉妹、親類の人々)の語りや会話	実数	138	85	223
	%	58.723%	43.147%	51.620%
0 非選択	実数	97	112	209
	%	41.277%	56.853%	48.380%
合計	実数	235	197	432
	%	100%	100%	100%

χ²乗検定

	χ ² 乗値	自由度	p値
X ² 総数	10.411 432	1	0.001

クロス集計表

V63		出生地		合計
		1 被災地	2 被災地外	
1 友人との会話や議論	実数	30	53	83
	%	25.424%	16.409%	18.821%
0 非選択	実数	88	270	358
	%	74.576%	83.591%	81.179%
合計	実数	118	323	441
	%	100%	100%	100%

χ²乗検定

	χ ² 乗値	自由度	p値
X ² 総数	4.597 441	1	0.032

クロス集計表

V64		出生地		合計
		1 被災地	2 被災地外	
1 学校教育	実数	98	238	336
	%	83.051%	73.684%	76.190%
0 非選択	実数	20	85	105
	%	16.949%	26.316%	23.810%
合計	実数	118	323	441
	%	100%	100%	100%

χ²乗検定

	χ ² 乗値	自由度	p値
X ² 総数	4.18 441	1	0.041

クロス集計表

V64		4年以上の被災地居住経験		合計
		1 あり	2 なし	
1 学校教育	実数	97	240	337
	%	84.348%	73.394%	76.244%
0 非選択	実数	18	87	105
	%	15.652%	26.606%	23.756%
合計	実数	115	327	442
	%	100%	100%	100%

χ²乗検定

	χ ² 乗値	自由度	p値
X ² 総数	5.636 442	1	0.018

クロス集計表

V65		性別		合計
		1 女性	2 男性	
1 ドキュメンタリーや記録映画、写真集、ネット動画などのノンフィクション作品	実数	165	81	246
	%	61.338%	48.795%	56.552%
0 非選択	実数	104	85	189
	%	38.662%	51.205%	43.448%
合計	実数	269	166	435
	%	100%	100%	100%

χ²乗検定

	χ ² 乗値	自由度	p値
X ² 総数	6.573 435	1	0.01

クロス集計表

V68		性別		合計
		1 女性	2 男性	
1 博物館や展示見学	実数	123	54	177
	%	45.725%	32.530%	40.690%
0 非選択	実数	146	112	258
	%	54.275%	67.470%	59.310%
合計	実数	269	166	435
	%	100%	100%	100%

χ²乗検定

	χ ² 乗値	自由度	p値
X ² 総数	7.406 435	1	0.007

クロス集計表

V68		出生地		合計
		1 被災地	2 被災地外	
1 博物館や展示見学	実数	58	124	182
	%	49.153%	38.390%	41.270%
0 非選択	実数	60	199	259
	%	50.847%	61.610%	58.730%
合計	実数	118	323	441
	%	100%	100%	100%

χ²乗検定

	χ ² 乗値	自由度	p値
X ² 総数	4.13 441	1	0.042

クロス集計表

V68		現在の居住地		
		1 被災地	2 被災地外	合計
1 博物館や展示見学	実数	106	76	182
	%	46.491%	35.349%	41.084%
0 非選択	実数	122	139	261
	%	53.509%	64.651%	58.916%
合計	実数	228	215	443
	%	100%	100%	100%

χ²乗検定

	χ ² 乗値	自由度	p値
X ² 総数	5.676	1	0.017
	443		

クロス集計表

V68		4年以上の被災地居住経験		
		1 あり	2 なし	合計
1 博物館や展示見学	実数	57	126	183
	%	49.565%	38.532%	41.403%
0 非選択	実数	58	201	259
	%	50.435%	61.468%	58.597%
合計	実数	115	327	442
	%	100%	100%	100%

χ²乗検定

	χ ² 乗値	自由度	p値
X ² 総数	4.269	1	0.039
	442		

クロス集計表

V68		知り合いに被災者がいる		
		1 いる	2 いない	合計
1 博物館や展示見学	実数	109	69	178
	%	46.383%	35.025%	41.204%
0 非選択	実数	126	128	254
	%	53.617%	64.975%	58.796%
合計	実数	235	197	432
	%	100%	100%	100%

χ²乗検定

	χ ² 乗値	自由度	p値
X ² 総数	5.706	1	0.017
	432		

(P<.05)に多かった。また、博物館や展示見学を効果的な手段と答えた回答者は、男性より女性に多く(P<.05)、出生地が被災地の回答者に多く(P<.05)、現在の居住地が被災地内である回答者にも多かった(P<.05)。最後に、追悼行事や記念イベントへの参加を効果的な手段だと答えた回答者は、男性より女性に有意に(P<.05)多く、また同時に、出生地が被災地である回答者に有意

クロス集計表

V70		性別		
		1 女性	2 男性	合計
1 追悼行事や記念イベントへの参加	実数	101	46	147
	%	37.546%	27.711%	33.793%
0 非選択	実数	168	120	288
	%	62.454%	72.289%	66.207%
合計	実数	269	166	435
	%	100%	100%	100%

χ²乗検定

	χ ² 乗値	自由度	p値
X ² 総数	4.439	1	0.035
	435		

クロス集計表

V70		出生地		
		1 被災地	2 被災地外	合計
1 追悼行事や記念イベントへの参加	実数	50	103	153
	%	42.373%	31.889%	34.694%
0 非選択	実数	68	220	288
	%	57.627%	68.111%	65.306%
合計	実数	118	323	441
	%	100%	100%	100%

χ²乗検定

	χ ² 乗値	自由度	p値
X ² 総数	4.193	1	0.041
	441		

(P<.05)に多かった。

これらまとめると、女性の方が男性より、博物館訪問や追悼行事への参加などイベント・コミュニケーションをより効果的な記憶継承手段だと考える傾向があると言えた。また、被災地に生まれた回答者は、そうでない回答者より、家族や友人の語りかけや会話など直接的な対人的コミュニケーションによる記憶継承が効果的だと考える傾向

向があると言うことができるだろう。

また、被災地に生まれたかどうかに関わりなく、被災地に長期に居住経験をもつ者は、学校で大震災についての授業を受けた経験があると思われる、その経験が投影されて、学校教育による記憶継承を効果的だと回答する傾向を持つようになったと想像できる。

C. まとめと考察

C-1. 大震災についての知識や情報のリソース

分析結果によれば、まず、被災地に生まれ、長い居住経験をもち、現在も居住している中核群の学生たちは、被災経験に触れる機会も多く、直接、被災者から大震災について知ることができ、また、被災地に固有のモニュメントや博物館からも知識や情報を得る機会を持っていた。それと比べて、教科書、映像系メディア(テレビ、映画、ネット動画など)などの情報ソースは、被災地や被災者へのアクセスがない周辺群の回答者にも、等しく知識や情報を得る機会を提供していた。このように、震災後世代の情報接触に関する個別の条件に応じて、それぞれ異なった特性をもつ、知識や情報を伝える回路が機能している。

もちろん、被災者、そして、被災経験のある家族、友人から直接、大震災の記憶を聴く機会をもつことの意味はきわめて重要であるといえるが、映像メディアのように、被災者／被災地との距離にかかわらず普遍性をもって大震災の記憶を伝えることのできる情報ソースの役割は、これから起こる被災者の高齢化や拡散などを考えると、その重要性を増していくように思われる。

一方、周辺群に属する学生たちにとって、大震災の知識や情報はメディアや教科書をつうじて提供されてはいるものの、被災者から、直接、話を聞いたり、現地を訪ねてモニュメントや記念碑に触れたり、追悼行事に参加して被災者に共感する機会は必ずしも多くはない。被災地か

ら離れ、被災者との直接的関係をもたない周辺群に属する人たちに対して、大震災の記憶を伝える、「メディア以外の回路」をいかに確保していくのかという課題も、同時にここから浮上しているのである。

C-2. 大震災についての関心、継承すべき記憶

今回の分析結果から大震災についての関心については、2つの要素が認められた。まず、1つ目として、被災者個人の大震災についての見解や震災後の生き方、亡くなった人の記録やエピソード、被災地で活動したボランティアたちの活動や経験、また、「災害弱者」が経験した困難など、大震災を体験した人間にかかわる事象に関心を向ける回答者の傾向がみられた。つぎに、もう1つの要素として、震災直後の避難誘導や救命救急、災害物資の支給などの支援活動、避難所や仮設住宅の生活や苦勞など災害救援活動全般にわたって関心を示す回答者の傾向が存在した。それには、将来の防災に役立つような教訓や知恵の継承についての関心も含まれていた。そして、当然のことながら、大震災について、被災者やボランティア活動など人間的要素に関心のある者は、同じく被災者やボランティア活動など人間的要素について記憶継承する必要があると考え、また、救命救急、医療や食料、避難所など救援活動について関心を示す者は、同様に救援活動についての記憶を継承する必要があると考える傾向が認められた。

救援や支援、防災にかかわる事実の継承とは次元を異にして、人間にまつわるさまざまな感情や苦悩、個人のエピソードや思い出としての記憶が、災害記憶の関心と継承にとって主要な要素の1つとして析出されたという事実の示唆するところはきわめて重要である。それは、社会的記憶というものが人間の物語として記憶されることで初めて人間社会にとって有意味な出来事として次世代に理解され、継承されていくものであるとい

う、M. アルヴァックスが指摘するところの人間の集合的記憶にとっての不可欠の要素¹⁴をあらためて想起させるからである。災害記憶が人間の経験や記憶として語り継がれることの意味をあらためて確認できたといえよう。

一方、回答者の属性が異なると、大震災に対する関心の傾向が異なり、また、継承する必要があると感じる記憶の内容も異なる傾向が認められた。この事実は、すでに単純集計の分析でも明らかになっているが、震災後世代が大震災の記憶を継承する際、継承すべき記憶に対して選択的であることを示唆している。この事実を考えれば、震災後世代がもつそのような傾向を注視し、記憶の継承にかかわるさまざまな活動、たとえば語り部活動、記録映像やドキュメンタリーの制作、博物館での展示、記念行事の企画などで補っていく努力が求められるだろう。そのためにも、記憶継承についての意識・態度について「否定的記憶への忌避指向」(D因子3)に示されたような震災後世代がもつ心理的傾向について、さらなる分析が必要となるだろう。

C-3. 大震災に対する認識、記憶継承に対する意識態度

分析結果から、被災地が出生地であったり、また、被災地での居住経験が長かったり、身近に被災経験者がいる震災後世代の若者は、被災者の心情や経験を語り継ぐことの意義を理解し、また、現在の被災地が復興を遂げ、そこに至る経過の記憶を継承することに積極的であることが分かった。これらの人々は、また、メディアや市民、行政などの社会システムが大震災の記憶継承に果たしてきた役割に対して肯定的評価を与えていた。

ただ、男性は、女性より、災害の爪痕は消し

て、新しい町並みや都市景観に作り変えるのがよいと考える傾向を示した。この結果を逆にみれば、女性の方が、災害の痕跡を残すことに積極的だと考えてよいだろう。この事実は、震災遺構の保存に関して社会的意思決定が求められるような状況が生じるとき、ともすれば社会的意思決定について優位な位置を占める男性の志向のみが強く意思決定に反映されるという事態を生じさせるおそれがある。震災遺構の保存や記憶の継承に関する社会的意志決定に関して、ジェンダーギャップの解消に積極的な取り組みが必要である。

C-4. 大震災の記憶継承の効果的手段

分析結果から、大震災の記憶を伝える手段のタイプは、被災者による語りかけや家族や友人の語りや会話など直接的な対人的コミュニケーションによる手段、学校における教育コミュニケーションによる手段、記録映像や小説、ネットなどメディア・コミュニケーションによる手段、博物館や記念碑訪問、追悼行事参加などのイベント・コミュニケーションによる手段の4つのグループが存在することが分かった。また、直接的な対人コミュニケーションをとる回答者は、学校による教育コミュニケーションも効果的と考える傾向があり、さらに、メディア・コミュニケーションも効果的と考える傾向がみとめられた。一方、それらとは別に、博物館や記念碑訪問などのイベント・コミュニケーションを採る者は、それ以外の手段のいずれかをとくに効果的であると考えたわけではないことが分かった。

対人的コミュニケーションと教育コミュニケーションとが一体となって、記憶継承に効果的であると震災後世代の若者たちに捉えられていることは、被災地における学校教育の場で大震災の記憶

14 モーリス・アルヴァックスは『集合的記憶』(小関藤一郎訳、行路社、1989年、p.74)において「実際に出来事についての何の思い出もたず、ただ歴史の観念だけにとどまっていたとしたら、…その際介入してくるのは抽象的知識であって、記憶ではない。」と論じている。つまり、アルヴァックスのいう歴史の観念をここで阪神・淡路大震災に関する諸事実の歴史的記録と置き換えてみれば、それは記録ではあっても、人間にとっての記憶というには不十分であるということであろう。

継承に努力が続けられていることを反映したものと考えられる。しかし、他方、博物館や記念碑などのモニュメント訪問や追悼行事への参加などのイベント・コミュニケーションは、他の手段との強い連関が見られなかった。もし、学校教育での博物館利用がもっと接触的に取り組まれたり、また、博物館が大震災の記憶の継承を目的とする情報をメディアで提供する試みや被災地内でのバーチャルな記念施設を開設する試みが、今後、積極的に進められるなら、このような傾向に少なからぬ変化が現れてくるかもしれない。

大震災の記憶を継承する、多面的な内容にわたる多様な手段による試みが、これからも続けられることが期待される場所である。